

連携や協働は仕事ではなく生き方

方に聞きました！
このお話し

有限会社 丸山薬局
大石 和美さん
（プライマリ・ケア認定薬剤師）



お話を伺った大石 和美さん

大石さんは薬科大学を経て、研究施設で10年にわたって創薬に携わり、ご結婚を機に名古屋の大学病院へ。そこで、身近にあっても相談にのってくれる総合的な医療「プライマリ・ケア」を学びました。

永源寺に帰ってきたのは先代の薬局店主である父親が脳塞栓に倒れたことがきっかけで、看取るまでの10年間、専門職やご近所の方に支えてもらったことが、専門職それぞれの仕事や地域の皆さんによるインフォーマルなサポートの重要性を実感することに繋がりました。大石さんは「この経験がなければ、内外のつながりもできず、ここにどまつて働き続けることもなかった。まさに父が私に残してくれた

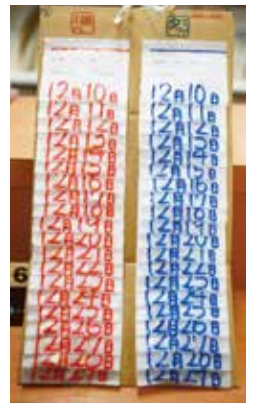
もの」と語ります。

介護保険が施行された2000年に、永源寺診療所へ赴任した花戸さんと出会い、それまでの医療でも福祉でもない「介護」について、共に勉強を重ねる中、参加者は地域の民生委員や生活支援サポーターへと拡大。大石さんは医療と介護の結び目、あるいは専門職と地域の皆さんとの橋渡し役として活動を続けてきました。

「ここで生きていくと決めたらできること」をやっていくだけ

連携する上で大切なことは、それぞれの職種や立場で、できること、できないことを明確に認識しあうことだと大石さんは語ります。「ヘルパーさんに痰の吸引はできませんし、薬剤師は注射を打てません。しかし『ある患者さんのお宅には汚れたりハビリパンツがいつも放置されている』と聞けば、訪問の際に汚物入れに片づけて、その数などをヘルパーさんに伝えます。逆に、薬の飲み残しなどを知らせてもらえることもあります」

大石さんが考案した服薬カレンダーを患者さんのお宅におくと、配食さんが一枚ちぎってお弁当の上に乗せてくれるなど「役割を分担しただけの連携



手作りの服薬カレンダー

では届かない思いが伝わっている。それが、ここで生きていこうと覚悟を決めた人と人とのつながりの力」であると語ります。

最後に「永源寺へ帰ると決心をしたとき、プライマリ・ケアの先生に『地域に育てられたのだから、地域に返さない。それは一生かかっても返さないほど大きなものであることを心にとどめて帰りなさい』と言われたことが、今もテーマになっていると語る大石さん。現在も高齢者のサポート以外に、小中学校での薬に関する授業をはじめ職種や立場を超えた「地域まるごとケア」に日々取り組まれています。

「絆貯金」は都会でも蓄えられる まず自ら行動してみてください

方に聞きました！
このお話し

永源寺診療所
所長 花戸 貴司さん

「永源寺の発展基盤は地縁的結びつきであり、住民同士の関係も深い。しかし田舎だから上手くいくわけではな

い」と花戸さんは語ります。「ここで暮らしていれば、都会の感覚でいう『煩わしい』ことも多くあります。しかしその積み重ねが将来、地域から返ってくる。私たちはそれを『絆貯金』と呼んでいます。この貯金のおかげで医療や介護が十分でなくても暮らしていける。また、『絆貯金』は都会でも蓄えられるはず。どんな人にも長く付き合ってきた友人や同僚、趣味などを新たに始めれば同好の仲間が。例えば入院をしても、患者さんのコミュニティに属することで安心した生活を送ることができます」と語る花戸さん。

最後に「絆貯金は若く健康で経済的にも自立できている内は必要性を感じにくいもの。定年退職や病気など節目に立つことでその意義が見えてくるはず。早い段階で様々なコミュニケーションに積極的に参加してみてください。老後を笑顔で過ごすためには、人とのつながりが一番」と語っていただきました。



お話を伺った花戸 貴司さん